

やぶにらみのガーナ訪問記

山中 和正（24 回生）

同窓会の「よさこい・イン・ガーナ」のちゃんとした報告書はサポータ団長の
中田君、あるいは彼の指定するどなたかから出ると思っていますので、こ
の記録は、私の勝手な印象を交えた、ある視点からの速報の訪問記です。

「私は午（うま）年生まれの馬です。午年の今年、私は本当の馬 ヤジ馬
になります！」 12月4日ガーナの首都アクラの質素なレストランで開かれ
た『高知県人会』の席で私はこう宣言した。「よさこい・イン・ガーナ」に駆け
付けた土佐高35回生を中心とする20人のサポータ達を、在留邦人の関係者が
迎えた歓迎会の席である。そして、翌々日、お祭終了後の打ち上げ会で、「馬に
なろうとしたのですが、熱気に引き込まれて馬を通り越して鹿になってしま
いました。踊るアハウという馬鹿にです」と告白した。

今回のガーナ訪問で、私は3つのことに感服した。第1に貧しい中に真摯に
生きるガーナの人々に感動した。第2に浅井大使が新しい発想で清楚な活動を
勇ましく進めている姿に感銘を受けた。そして、第3にヨサコイ・ダンスを踊
るガーナの人々の熱い踊りに感涙を流した。

ガーナはやっと政情が安定し、これからという発展途上国である。経済的
には貧困であり、文化的にも未熟な点が多々あるが、よくなろうと真剣に努力し
ている姿は美しい。市民生活を見学しながらそう感じた。

私達が訪問中の12月5日、ガーナ政府の要人、各国大公使、在留邦人など
を大使館公邸に招いての天皇誕生日祝賀のレセプション・パーティが催され、
サポータの一行も末席を汚した。そこでの浅井大使の英語での格調高いスピー
チは見事であった。仄聞すれば、平生の活動もガーナ政府や在留邦人に評判が
いいようである。高知県人としても、また土佐高同窓生としても熱いエールを
送ろう。

そして、何と言っても圧巻はヨサコイ・ダンスである。500人を超す踊り
子と、2000人の観客が広いチルドレンズ・パークを埋め尽くし、大音響で
エンドレスに流れるよさこい音頭のメロディに乗ってアフリカ調の激しい踊り
が繰り広げられた。メロディはよさこいであるが、リズムはビートの強いサン
バかロックである。そのさまはペンや静止画像では伝え難い。「日本の恥になる
から」と踊るのを躊躇していた私ですら、チームの秩序を乱しながらメチャク
チャに踊ってしまったことからその熱気が伝わることであろう。

サポーター一行の団長格の中田昌志さん（35回生）、副団長格の中村明裕さん（35回生）、公文敏雄さん（35回生）、顧問格の溝渕真清さん（32回生）、森本堯士先生（32回生）、お嬢さんまで動員下さった大石晃さん（33回生）、冷静にしかも感動しながら踊って下さった上村浩さん（30回生）、踊りと祭と旅が何よりも大好きな入江治美さん、織田耕作さん、吉村次夫さん、そしてその家族の方々。ご苦労様でした。

何よりも、無報酬で我々の踊りの特訓をし、ガーナのチームにアドバイスを与え、すばらしい Exhibition Performance を披露して会場を盛り上げて下さった国友須賀さん率いる3人の須賀ジャズ・ダンス・スタジオの面々、本当に有難う御座いました。

また、高知新聞から派遣された大山哲也特派員（64回生）も感激しながら取材していましたのできっといい記事を書いてくれるでしょう。

皆さん！ 「よさこい・イン・ガーナ2003」でまた会いましょう。

後記：どこかで食べたものでも悪かったのか、疲れが出たのか帰りの機中でお腹の調子が悪くなり、乗り継ぎのロンドン空港で下痢、帰着の成田空港で嘔吐のためトイレに駆け込み、私のテリトリーを示す汚物のDNAをしっかりと残してきました。こうして私はとうとう行った先に印をつけてくる犬になって帰ってきました。我が家には戌（いぬ）年生まれの家内という犬がもう一匹いますので、これで犬だけの水入らずのスイートホームになりました。メデタシ。メデタシ。





サポーター行全員（20人）と浅井さん父娘



ガーナチーム
の踊り。奥にか
かった土佐高
同窓会の旗を
お見逃しなく。



須賀ダンススタジオの面々



一行の中では入江さんがベテラン